

2005年12月27日

沖縄総合事務局長 様
開発建設部長 様
那覇港湾・空港整備事務所長 三宅光一 様
港湾技術指導官 酒井洋一 様
港湾計画課長 嶋倉康夫 様

泡瀬干潟を守る連絡会 共同代表

内間秀太郎 小橋川共男 漆谷克秀

泡瀬干潟生物多様性研究会 代表 山下博由 印省略

連絡先 前川盛治（泡瀬干潟を守る連絡会事務局長）

090-5476-6628



浚渫予定地の絶滅危惧種の保全等について

泡瀬干潟埋立事業の今年度の工事は、仮設航路（栈橋）周辺の浚渫、その土砂の現工事区域への投入がある。その区域には、今度改定された「レッドデータおきなわ」に記載されている「絶滅危惧種」が多数生息している。その詳細は別紙記者会見資料の通りである。

要点を示せば、浚渫場所に19種が生息している、トウカイマキは国内最大規模の生息地、ゾウハグサは日本でここでしか生息が確認されていない、ヒメマカイ沖縄型は新種の可能性がある等である。

そのまま工事が行われれば、絶滅危惧種が「絶滅」になるおそれがある。私たちは、事業者はその保全のため工事を中断して調査することを要請してきた。また、私たちはアサギガエシ（仮称）、ウツリ属の1種、ミル属の1種が泡瀬で確認されそれが新種の可能性があることから、その保全を求めてきた。しかし、事業者（総合事務局・県港湾課）は、絶滅危惧種が泡瀬海域に生息していることを12月7日、県に報告しているが、浚渫予定地の詳細については明らかにしていない。また、報告した種についての保全策は全く示されていない。さらに、それらを保全することなく、浚渫工事を続行するとしている。アサギガエシ等は「調査の可能性等を含め検討」とあり、種の保全・自然環境の保全への配慮がまったく無い。以上述べた事業者の対応は、アセス書に示した対応にはなっていない。

また、事業者はジャングサマテガイの調査結果を12月19日、県に報告している。内容は、埋立予定地に4個体、埋立予定地外で5個体発見、埋立予定地内は消失する、予定地外はモニタリングを行う等となっている。この報告は、環境への配慮が全くなく、絶滅危惧種の保全になっていない。

私たちは、浚渫場所に生息する「絶滅危惧種」及び新たに発見された新種の可能性がある種を保全するために、事業者に次のことを要請する。

要請

1. 12月7日の事業者報告の中で、「レッドデータブック記載種についての詳細な情報は、現段階では得られておらず、事業者としては慎重なモニタリングを行いながら工事を進めていく」としている。また、県に報告した絶滅危惧種の貝類（90種）のなかで、何種が浚渫場所に生息しているか明らかにされていない。

私たちの調査では、別紙記者会見で示したように、浚渫予定地に絶滅危惧種19種が生息していることが確認されている。

浚渫場所の絶滅危惧種の貝類等海洋生物種を明らかにし、その保全策を示すこと、その間浚渫工事を中断すること。

2. アサヒナガマシマアゲマキ（仮称）、ウミウリ属の1種、ミル属の1種について、「希少性が位置づけられておらず、発見位置及び分布状況があきらかになっておりません」「調査の可能性等を含め検討する」としていますが、調査は、事業者の責務です。情報不足で調査できないとか、貴重性の位置づけが終わってから保全を検討するのでは、種の保全になりません。早急に調査し、その保全策を示すこと。
3. 事業者は、ジャングサマテガイについて、埋立予定地で4個体（全体9個体の44%）確認しているが、それは消失するとしている。埋立予定地内のジャングサマテガイの保全策を示すこと。
4. 絶滅危惧種や新種等の調査結果やその保全策については、環境監視委員会を早急に開催・報告しその保全について指導助言を受けること。また、その間工事を中断すること。
5. アセス書に示した対応（事業者見解）を遵守すること。

参考1：別紙記者会見文書

泡瀬の仮設航路浚渫予定地において「改定・レッドデータおきなわ」に記載された貝類32種（生息19種）を確認 表1 貝類一覧表 表2 浚渫予定地での確認種数

参考2：アセス書での貴重種・絶滅危惧種が発見されたときの対応は下記です。

知事意見：工事中に貴重な動植物が確認された際は、関係機関に報告するとともに、適切な措置を講じること。

事業者見解：工事中に天然記念物指定種や「レッドデータブック」、「レッドリスト」等の掲載種、その他貴重種・重要種に相当する種で、環境影響評価書に記載されている動植物種以外の種の存在が埋立てに関する工事の施工区域内若しくはその近傍で確認された場合には、関係機関へ報告するとともに十分調整を図り、その保全に必要な措置を適切に講じます。

泡瀬の仮設航路浚渫予定地において「改訂・レッドデータおきなわ」に記載された貝類 32 種(生息 19 種)を確認

泡瀬干潟を守る連絡会 共同代表 内間秀太郎 小橋川共男 漆谷克秀
連絡先 事務局長 090-5476-6628(前川)
泡瀬干潟生物多様性研究会 代表 山下博由
神奈川県藤沢市鵠沼松が岡 3-1-26-103
090-7167-3549/ yamashitayou@aol.com

沖縄市泡瀬の海上では、中城湾港(泡瀬地区)埋立事業における工事が進行中である。本年度は仮設航路浚渫工事が計画されており、この12月にも着工される予定とされている。

泡瀬干潟を守る連絡会と泡瀬干潟生物多様性研究会は、本年度の仮設航路浚渫工事予定地(以下、浚渫予定地)において、2005年に貝類の調査を行なった。その結果、浚渫予定地から「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 レッドデータおきなわ」(以下、レッドデータおきなわ)に記載された貝類を確認したので報告し、泡瀬地区埋立事業の環境保全上の問題点を指摘する。

1. 浚渫予定地から、「レッドデータおきなわ」に記載された貝類として、32種(生息:19種、死殻:13種)を確認した。
2. 浚渫予定地には、「レッドデータおきなわ」に記載された貝類の絶滅危惧IB類4種、絶滅危惧II類3種、準絶滅危惧8種、情報不足4種(合計19種)が生息している。
3. 浚渫予定地で、絶滅危惧IA類であるナノハナガイの極めて新鮮な殻を確認した。生息している可能性が高いと考えられる。
4. 浚渫予定地の砂洲で、ニライカナイゴウナの生息を確認した。
5. 浚渫予定地の砂洲は、トウカイトママキ(絶滅危惧IB類)の国内最大規模の生息地であることが確認された。
6. 浚渫予定地の砂洲には、トウカイトママキ・カゴガイ・フジイロハマグリ・ヒメツメタガイ沖縄型・ニライカナイゴウナ・フキアゲアサリなどの「レッドデータおきなわ」記載種が多く生息しているが、これらの種はいずれも日本及び琉球列島において生息地の限定された希少な種である。この砂洲の生態系は日本及び琉球列島において極めて貴重であると考えられる。

以上の諸点から、浚渫予定地は保全の必要性が極めて高い貴重な生態系であると指摘される。

したがって、

- 1) 沖縄総合事務局・沖縄県は、浚渫予定地の生物調査を行ない、その生態系の価値と保全策を検討すること。
- 2) 沖縄総合事務局・沖縄県は、浚渫予定地の生物調査の結果を公表し、その生態系の保全策を環境監視委員会において検討すること。また、生物調査の結果・保全策において、専門家の助言を受けること。
- 3) 「レッドデータおきなわ」は沖縄県の環境・生態系・生物を保全するための基本的政策指針であるため、「レッドデータおきなわ」に記載された種が発見された場所においては、十分な環境保全上の配慮が成されること。

以上を提言する。

浚渫予定地の環境と貝類

1. 浚渫予定地の環境

浚渫予定地には、水深 1m前後の海中砂洲(細砂底)と水深 3m前後の海草藻場(サンゴ礫底・砂泥底)の異なった環境が存在している。

2. 浚渫予定地の砂洲の環境と貝類

浚渫予定地を南北に縦断する砂洲は低潮帯から潮下帯に広がっており、ほとんどが 1m前後の海中にある。面積は広く、底質は細砂である。この砂洲には、トウカイタママキ・カゴガイ・フジイロハマグリ・ソメワケグリ・ヒメツメタガイ沖縄型・ニライカナイゴウナ・チリメンカノコアサリ・フキアゲアサリ・クサビザラ属の 1 種などが生息し、ソメワケグリ・ヒメツメタガイ沖縄型・ニライカナイゴウナ・チリメンカノコアサリ・フキアゲアサリ・クサビザラ属の 1 種が優占する。「レッドデータおきなわ」の記載種が多く生息している。これらの種はいずれも日本及び琉球列島において生息地の限定された希少な種である。トウカイタママキの個体群は、現在知られている限り日本最大の個体群である。フジイロハマグリは日本では現在、この砂洲でしか生息が確認されていない。この砂洲はニライカナイゴウナの第一発見地である。ヒメツメタガイ沖縄型は新種の可能性もある珍しい種であるが、砂洲に多く生息している。浅海の細砂底という琉球列島において稀な環境に、特異な貝類群集が成立している。この砂洲は日本及び琉球列島において極めて貴重な生態系であると言える。泡瀬海域の中で、この砂洲に代替できるような環境・場所は確認されていない。泡瀬海域の中でも、固有の環境・生物群集をもった「代替の効かない」場所である。浚渫工事によって、この砂洲の 2 分の 1 が失われ、残りの 2 分の 1 も侵食によって環境が激変すると考えられる。

3. 浚渫予定地の海草藻場の環境と貝類

砂洲より深くなった場所には、海草藻場(サンゴ礫底・砂泥底)が広がっており、リュウキュウスガモなどの大型海草藻場とウミヒルモ類の生えた小型海草藻場が混在する。ここでは、泡瀬及び琉球列島の海草藻場に典型的かつ貴重な種が多く見られる。貴重な種であるコウシヒメムシロの殻も多く確認された。

表1

泡瀬の仮設航路浚渫予定地で確認された
「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 レッドデータおきなわ」
に記載された貝類

種和名 (グレー地は浚渫予定地に生息)	改訂RDB評価	浚渫予定地 海草藻場	浚渫予定地 砂洲
ナノハナガイ	絶滅危惧IA類	FD	
ハートガイ	絶滅危惧IB類		L
トウカイタママキ	絶滅危惧IB類		L
ニッコウガイ	絶滅危惧IB類	D	
ジャングサマテガイ	絶滅危惧IB類	D	
マダライオウハマグリ	絶滅危惧IB類	FD	L
シラオガイ	絶滅危惧IB類	D	L
ヒメオリイレムシロ	絶滅危惧II類	L	
カブラツキガイ	絶滅危惧II類	D	
カゴガイ	絶滅危惧II類		NL
ヒラセザクラ	絶滅危惧II類	L	
フジイロハマグリ	絶滅危惧II類		NL
ウスカガミ	絶滅危惧II類	L	
オハダロガイ	準絶滅危惧	L	
リュウキュウサルボウ	準絶滅危惧	D	
ソメワケグリ	準絶滅危惧	FD	L
ホソスジヒバリガイ	準絶滅危惧	D	
サザナミマクラ	準絶滅危惧	L	
チヂミウメノハナ	準絶滅危惧	D	
オキナワヒシガイ	準絶滅危惧	L	
エマイボタン	準絶滅危惧	L	
ユキガイ	準絶滅危惧	D	
コニッコウガイ	準絶滅危惧	D	
ミガキヒメザラ	準絶滅危惧	L	
トゲウネガイ	準絶滅危惧	L	
ハスメザクラ	準絶滅危惧	FD	
ネコジタザラ	準絶滅危惧	D	
ゴイシザラ	準絶滅危惧	L	
ヒメツメタガイ沖縄型	情報不足		L
ニライカナイゴウナ	情報不足		L
ウネイチョウシラトリ	情報不足	D	
チリメンカノコアサリ	情報不足		L
トモシラオガイ	情報不足	D	
フキアゲアサリ	情報不足		L

L=生息、FD=新鮮な殻を確認、D=殻を確認、NL=近接地に生息

表2 浚渫予定地での確認種数

改訂RDB評価	生息	死殻	合計
絶滅危惧IA類	0	1	1
絶滅危惧IB類	4	2	6
絶滅危惧II類	3	1	4
準絶滅危惧	8	7	15
情報不足	4	2	6
合計	19	13	32

フジイロハマグリ（「改定・レッドデータおきなわ」絶滅危惧Ⅱ類）

写真提供：山下博由氏

発見者：照屋清之介氏



このフジイロハマグリは、日本で泡瀬干潟の浚渫場所近くの砂州周辺のみで生息が確認されている。金武湾などにもいるといわれるが生貝の確認は泡瀬砂州周辺だけである。浚渫が行われると、絶滅のおそれがある。

事業者は、この種を未だ確認していない

が、浚渫工事は続行するとしている。

「改定・レッドデータおきなわ」での記載

和名：フジイロハマグリ

分類：マルスダレガイ目マルスダレガイ科

学名：Callista erycina (Linnaeus, 1758)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省カテゴリー：該当なし

形態：殻長約6 cm、卵楕円形。殻頂は前方に寄る。殻表には光沢があり、太い成長輪肋に覆われる。放射彩を持つ。内面後端は紫彩される。

分布の概要：奄美以南に分布するとされているが、琉球列島における分布域は、沖縄島金武湾などの特定の地域に限られる。

生息地の条件：フジイロハマグリは、内湾域潮下帯の安定した砂底域を生息場所としている。

現在の生息状況：沖縄県内におけるフジイロハマグリの生息確認地点は、金武湾湾口部（平安座島沖）および中城湾泡瀬干潟の2地域。泡瀬干潟では、照屋清之介氏により通信施設南岸沖の低潮帯砂底域から見出されている。

学術的意義・評価：フジイロハマグリの生息環境である内湾潮下帯砂底域は、琉球列島においては限られた生物生息環境である。フジイロハマグリは、沖縄の海岸環境の多様性を認識するうえで重要な指標種である。また、沖縄島のフジイロハマグリ個体群は、隔離個体群として生物地理学的に重要。

生存に対する脅威：泡瀬干潟におけるフジイロハマグリの生息域では、埋め立て工事がおこなわれている。金武湾の生息域では、大規模な浚渫が行われている。沖縄県内のフジイロハマグリの生息条件は、すべての生息地で急激に悪化しており、個体群の存続が危ぶまれる。

執筆者名：名和純

トウカイトママキ（「改定・レッドデータおきなわ」絶滅危惧Ⅱ類）



（トウカイトママキ 写真：長田秀巳）

和名：トウカイトママキ 分類：マルスタ
レガイ目バカガイ科

学名：Mactra pulchella Philippi, 1852

カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN）

環境省カテゴリー：該当なし

形態：殻長約1.5～2cm、三角形の二枚貝。殻頂は後方に寄り、紫彩される。殻表は紫褐色、2

本の白い放射色帯がある。内面は紫色。

分布の概要：屋久島、種子島、奄美大島、沖縄島に分布。中国大陸南岸にも分布するとされている。

生息地の条件：トウカイトママキは、内湾低潮帯～潮下帯の砂底域を生息場所とする。本種の生息する砂底域は、内湾域全体における環境傾度の推移の上に成り立っている安定した環境である。

現在の生息状況：沖縄県内におけるトウカイトママキの生息域は、沖縄島大浦湾および中城湾泡瀬干潟に限られる。いずれの地域でも、一回の調査で1、2個体が見出される程度と生息密度は低い。

学術的意義・評価：トウカイトママキは、琉球列島の海産貝類の中で最も分布域の狭い種の一つであり、琉球列島の海岸生物の由来や海岸環境の成立を考える上で重要な種である。

生存に対する脅威：泡瀬干潟の生息域では、埋め立て工事が行われている。また、大浦湾の生息域では流域開発や橋梁工事に伴う土砂堆積が進行している。トウカイトママキの沖縄個体群は、絶滅リスクの高い状態にあると考えられる。

参考文献：松隈明彦，1986．バカガイ科．“決定版生物大図鑑貝類”，奥谷喬司編，世界文化社，東京． 執筆者名：名和純

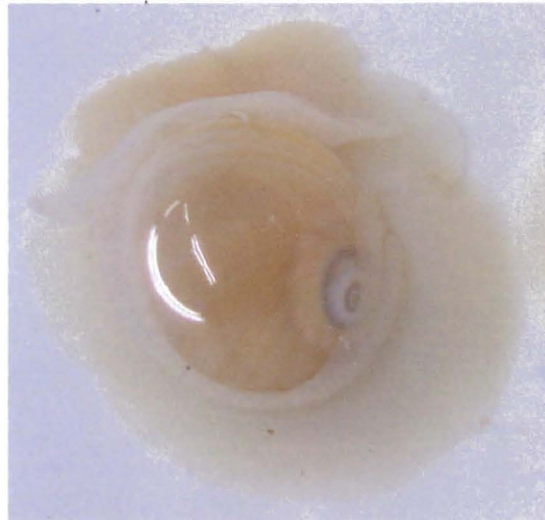
ヒメツメタガイ沖縄型についての追加文書（山下博由氏）

ヒメツメタガイ沖縄型：「改訂レッドデータおきなわ」において情報不足のカテゴリーに入られている重要な種。これまで、沖縄本島の羽地海域でしか生息が確認されておらず、中城湾での生息が初めて確認された。沖縄諸島に分布するツメタガイ属の唯一の種で、分類学的位置付けが確定していない（新種や新

亜種の可能性もある)。泡瀬の浚渫予定地の砂州に豊富に生息しているが、同砂州以外では確認されていない。泡瀬は本種の、沖縄本島で2箇所目、中城湾で唯一の貴重な生息確認地である。



ヒメツメタガイ沖縄型 山下博由



ヒメツメタガイ沖縄型 山下博由



オハグロガイ 写真：水間八重



シラオガイ 写真：水間八重

記者会見で明らかにした 19 種の生貝の中の、5 種の貝の写真

フジイロハマグリ、トウカイタママキ、シラオガイ、オハグロガイ、ヒメツメタガイ沖縄型



フジイロハマグリ、山下博由氏提供



トウカイタママキ、山下博由氏提供



ヒメツメタガイ沖縄型、山下博由氏提供



トウカイタママキ 長田秀巳氏提供



シラオガイ、水間八重氏提供



オハグロガイ、水間八重氏提供

泡瀬干潟、浚渫工事区域で見つかった絶滅危惧種の貝

トウカイトマキ (絶滅危惧 I B 類、レッドデータおきなわ)



写真長田秀巳 2005年6月



写真長田秀巳 2005年6月



写真長田秀巳 2005年6月



写真 山下博由

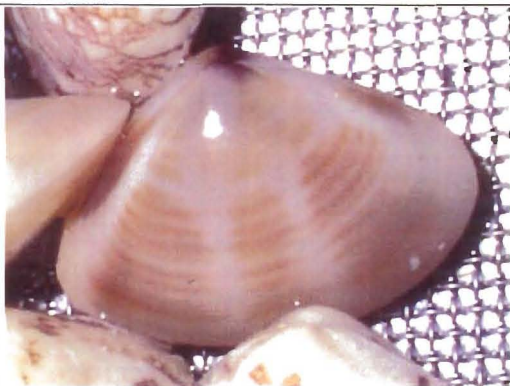


写真 山下博由



写真 山下博由